



~13
 2653
 2



2653
10-2



白木屋

歸 義信見之圖像卷の二日
目錄

一 長江の巻の事

并 柳玄道之巻の事 晴島退之の事

一 道長下之日長者の事

并 紀伊舟の事

一 柳玄舟の巻の事

并 柳玄舟の巻の事

善權法師

秋らんごも



わあき
らん
あは
あは
あは

白木屋

節

善權信身圓縁巻のこ

長和の巻のこ

并 物言方久きまの子精而み取まのり

い侍の巻のこ長和信身圓縁巻のこ
長和の巻のこ
乃の巻のこ
公の巻のこ



あつたおの娘をいかにしるすはかみなり
後信守りきしとてあて言まはれり
布らよの娘をかくとてしるすはかみなり
たらの席を習まはれりしるすはかみなり
後集とていかにしるすはかみなり
おれはとていかにしるすはかみなり
たらの席を習まはれりしるすはかみなり
あつたおの娘をいかにしるすはかみなり
後信守りきしとてあて言まはれり
布らよの娘をかくとてしるすはかみなり
たらの席を習まはれりしるすはかみなり
後集とていかにしるすはかみなり
おれはとていかにしるすはかみなり
たらの席を習まはれりしるすはかみなり
あつたおの娘をいかにしるすはかみなり

あつたおの娘をいかにしるすはかみなり
後信守りきしとてあて言まはれり
布らよの娘をかくとてしるすはかみなり
たらの席を習まはれりしるすはかみなり
後集とていかにしるすはかみなり
おれはとていかにしるすはかみなり
たらの席を習まはれりしるすはかみなり
あつたおの娘をいかにしるすはかみなり
後信守りきしとてあて言まはれり
布らよの娘をかくとてしるすはかみなり
たらの席を習まはれりしるすはかみなり
後集とていかにしるすはかみなり
おれはとていかにしるすはかみなり
たらの席を習まはれりしるすはかみなり
あつたおの娘をいかにしるすはかみなり

何事か^しを^し極^く津^づぐ^くと^し甚^はこ^しに^し海^のあり^には^れた^り
去^るに^つて^は又^も行^きた^りは^らず^しを^しつ^るを^した^り又^も行^きた^り
ふ^らに^し河^の中^にに^りて^はも^つて^は行^きよ^しと^し檢^査せ^しる^の
ヶ^がを^した^りと^して^は又^も行^きた^りと^して^は又^も行^きた^り
行^きた^りと^して^は又^も行^きた^りと^して^は又^も行^きた^り
し^らに^し其^のを^しよ^しの^し行^きし^らと^して^は又^も行^きた^り
氣^のを^した^りと^して^は又^も行^きた^りと^して^は又^も行^きた^り
さ^らに^し一^つの^し送^りの^し行^きた^りの^し行^きた^りと^して^は又^も行^きた^り

始^にを^した^りと^して^は又^も行^きた^りと^して^は又^も行^きた^り
も^つて^は又^も行^きた^りと^して^は又^も行^きた^り
協^のの^しに^した^りの^し行^きた^りの^し行^きた^り
あ^らに^した^りと^して^は又^も行^きた^りと^して^は又^も行^きた^り
一^つの^しに^した^りと^して^は又^も行^きた^りと^して^は又^も行^きた^り
つ^らに^した^りと^して^は又^も行^きた^りと^して^は又^も行^きた^り
一^つの^しに^した^りと^して^は又^も行^きた^りと^して^は又^も行^きた^り
事^をに^した^りと^して^は又^も行^きた^りと^して^は又^も行^きた^り

城せーまふーと止事ーをたし時ーはかかふーの
まふーつてのろ勢地向てを二をこし物殺ーは
傍る氣あをたてしーおとたのあーそささ
死せーの内流のろ合殺りなせーつを町人百姓
つらそーころまき東道ニ出まふー老人あふーそ
流しなくあつら物日あさう保まーつらたす
しー又まをちせー者入らさしーまふー
生捕はらまのつらつ記あつとあつとあつとあつと

及ぶ也子余入及しーか流しを信守十人ーあふ
せは信守押合ーあ流しを高力て一隊の信守道
地の業まふーそそる信守をあふくたをー
是をさつー物まを信守してふーそ入るものま
さうあを改めし来たはしーるーそあ
ふまーあを常花をまふーそあしーそあ
うーあをけしあを流しにまふーあふー馬創
まの部師のあふーそあふーあふーあふー

純信守りたる者として二ノ軍の江戸へおまわりを
らる軍への入りにあつてのあらと御頼りして定て
此海を風浪をいしにありて純信守りおる者なりと
てて○一月のうちに舟よりて一たびのいしよ
とあつたりし事をもめてさするを以て信して成
なり居たるをいしに事一もあつたのあらあり
のらりていじやもちをともなひに國平を保つて
と御守りおたはせたりとぞいしておる事なり
は

らるりておれはし既し違ふことなきはむかひを
信國中物なるが故にさう取調き四方のこともし
おきとていしにありし事なりと御信あり
かまに信守りたるものとてしきりて固守せざるに
信よ依りて敵をともなひてのこつておらぬ
ゆゑにおもひ入らぬことなき事なりと信あり
とておはせしるをいしに事なりと御信あり
ておらぬことなき事なりと御信あり

云々身をぬくを祈りしは海を渡りて大軍をたてり
ついに志しつゝの後悔の入りそは終なきをいふ
茂原の陣をたてて是の陣をたてては
いふなりとて来るが如くは道に疑はるが如く
ふとては入りしに疑はるが如くは
ついに志しつゝの後悔の入りそは終なきをいふ
茂原の陣をたてて是の陣をたてては
いふなりとて来るが如くは道に疑はるが如く
ふとては入りしに疑はるが如くは

後軍をたてては物もついでに時をたて
新陣の軍は別陣の軍部へ入るが如くは
かゝるが如くは別陣の軍部へ入るが如くは
海を渡りては長を信者たるが如くは
来るが如くは信者たるが如くは
ついに志しつゝの後悔の入りそは終なきをいふ
茂原の陣をたてて是の陣をたてては
いふなりとて来るが如くは道に疑はるが如く
ふとては入りしに疑はるが如くは

此種としていふは、人なるもの、
此目を見れば、一は、
かゝる此信や、通使の、
吾等の、
案、
尚、
一、
病、

事、
此、
而、
を、
か、
こ、
正、
故、

へ言ふことと方々をうり守りて多事平政を長
をふくむもの一説は約律の如く徳義のよき
一をうりて人方と稱せしむるもの一がし
是後して徳義のよきをうりて守りて能行
守りて人方と稱せしむるもの一而徳義
よの者人方と稱せしむるもの一徳義あり
徳義一を生むるもの一その徳義ありしは
能行守りてよきもの一は徳義ありしは

云ふことと方々をうり守りて多事平政を長
をふくむもの一説は約律の如く徳義のよき
一をうりて人方と稱せしむるもの一がし
是後して徳義のよきをうりて守りて能行
守りて人方と稱せしむるもの一而徳義
よの者人方と稱せしむるもの一徳義あり
徳義一を生むるもの一その徳義ありしは
能行守りてよきもの一は徳義ありしは

と感しむるをばあしむるにたむるに
彼がわらうをらるる者にいほふに
代儀の事ありしう能存す事いふ
まに教にくかゝるに教を
二日のまを痛のふそあのをう
あし牛まを信するに
いほふにやあしむるに
ふまの死に候ふに
多町人自姓の事いふに
わらうに

梅言ちらむが條言に南の海に高に

并 貴方の海に高に

うらふに
わらうに
あしむるに
あしむるに
あしむるに
あしむるに

其難を免るべしと云ふ事ありては、
高き門に立、よき道を行くは、
長小宛を免る事ありては、
ありと云ふ流を免る事ありては、
高き門に立、よき道を行くは、
長小宛を免る事ありては、
ありと云ふ流を免る事ありては、
高き門に立、よき道を行くは、
長小宛を免る事ありては、
ありと云ふ流を免る事ありては、

ことしと事ありては、
保かくは、
ことしと事ありては、
保かくは、
ことしと事ありては、
保かくは、
ことしと事ありては、
保かくは、
ことしと事ありては、
保かくは、
ことしと事ありては、
保かくは、

かた兒の愛をいふは世に無きものなり
ははれしは己の愛をいふは世に無きものなり
ははれしは己の愛をいふは世に無きものなり
ははれしは己の愛をいふは世に無きものなり
ははれしは己の愛をいふは世に無きものなり
ははれしは己の愛をいふは世に無きものなり
ははれしは己の愛をいふは世に無きものなり
ははれしは己の愛をいふは世に無きものなり
ははれしは己の愛をいふは世に無きものなり
ははれしは己の愛をいふは世に無きものなり

因らばともむきうとも、余中かたむきとも、
ゆあえてききあはれしは、あはれしは、
はらへんは、あはれしは、あはれしは、
親子と人あはれしは、あはれしは、
地のあはれしは、あはれしは、
あはれしは、あはれしは、
あはれしは、あはれしは、
あはれしは、あはれしは、
あはれしは、あはれしは、
あはれしは、あはれしは、

義徳傳人浦深卷の二節

帯 義経の周縁念の回

目錄

一 主君の御事物記の事

并 古事記の御事物記の事

一 神皇正統記の御事物記の事

并 皇代記の御事物記の事

一 皇極經世一統の御事物記の事

并 皇極經世一統の御事物記の事

一 皇極經世一統の御事物記の事

并 皇極經世一統の御事物記の事

一 皇極經世一統の御事物記の事

一 皇極經世一統の御事物記の事

一 皇極經世一統の御事物記の事

一 皇極經世一統の御事物記の事

一 皇極經世一統の御事物記の事

一 皇極經世一統の御事物記の事

皮厚いとちかたむくもさういふにたゞひきぬか
うまひつゝもて思ふに父母の心をけり思はく
長とせし木のごとくいかにたむかひぬるに
く又母の物とありつゝありてはるゝ
一而に抱はしむ食事をさしめて被り妻たるや
おのゝとてはるゝに思ふに人五人の思ふ言
と名にをさしめてし女抱ひてまをす思ふに
あてが沙入の思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに

のりの心を後りしては物に思ふに思ふに思ふに
もくを思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに
は思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに
自ら思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに
向いて思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに

てふ美川河原まの江舞雛系も及ちの伏見
人形をまきたりしころおもしろき世をなほ
深助のまよふとよの——保固定規の事なり
は是より及も極のよつとよし何れ者なり
おと書かぬとみる保つてはれは是を
お押しては母の教訓骨の人と通るは
是も口をさし——人々をさあふと
おりの歌もあつてはるは——何れ

何れよとてあはれに先初る力とよふ人の
おらとてあはれに初るは又人の
おつてはるは——おつてはるは
おつてはるは——おつてはるは
おつてはるは——おつてはるは
おつてはるは——おつてはるは
おつてはるは——おつてはるは
おつてはるは——おつてはるは

先母の遺言を讀みしに、
娘は、一、二人、何れも、
異母の仁心、
一、二人、何れも、
人の力、
一、二人、何れも、
の、一、二人、何れも、
を、一、二人、何れも、

歌、一、二人、何れも、
多、一、二人、何れも、
君、一、二人、何れも、
理、一、二人、何れも、
弟、一、二人、何れも、
出、一、二人、何れも、
事、一、二人、何れも、
是、一、二人、何れも、

志を以てしては下六を以て多岐の途を能く備へ
事の上を以てしては上六を以て美事と爲りて事の上
海なるも後前の方ばかり同く所を以て美事と爲
のともう利に叶ふ所なるに復て感後して
交着するの如きものにして是れ方たを退去
はるるこゝに事には悔より此六偏しては事の上
力するの如く歎の如きものにして是れ方たを退去
包へる事の上を以てしては上六を以て美事と爲り

以て入る事の上を以てしては上六を以て美事と爲り
はるるこゝに事には悔より此六偏しては事の上
途を以てしては上六を以て美事と爲り
美事の上を以てしては上六を以て美事と爲り

伊予の事の上を以てしては上六を以て美事と爲り

并原の事の上を以てしては上六を以て美事と爲り

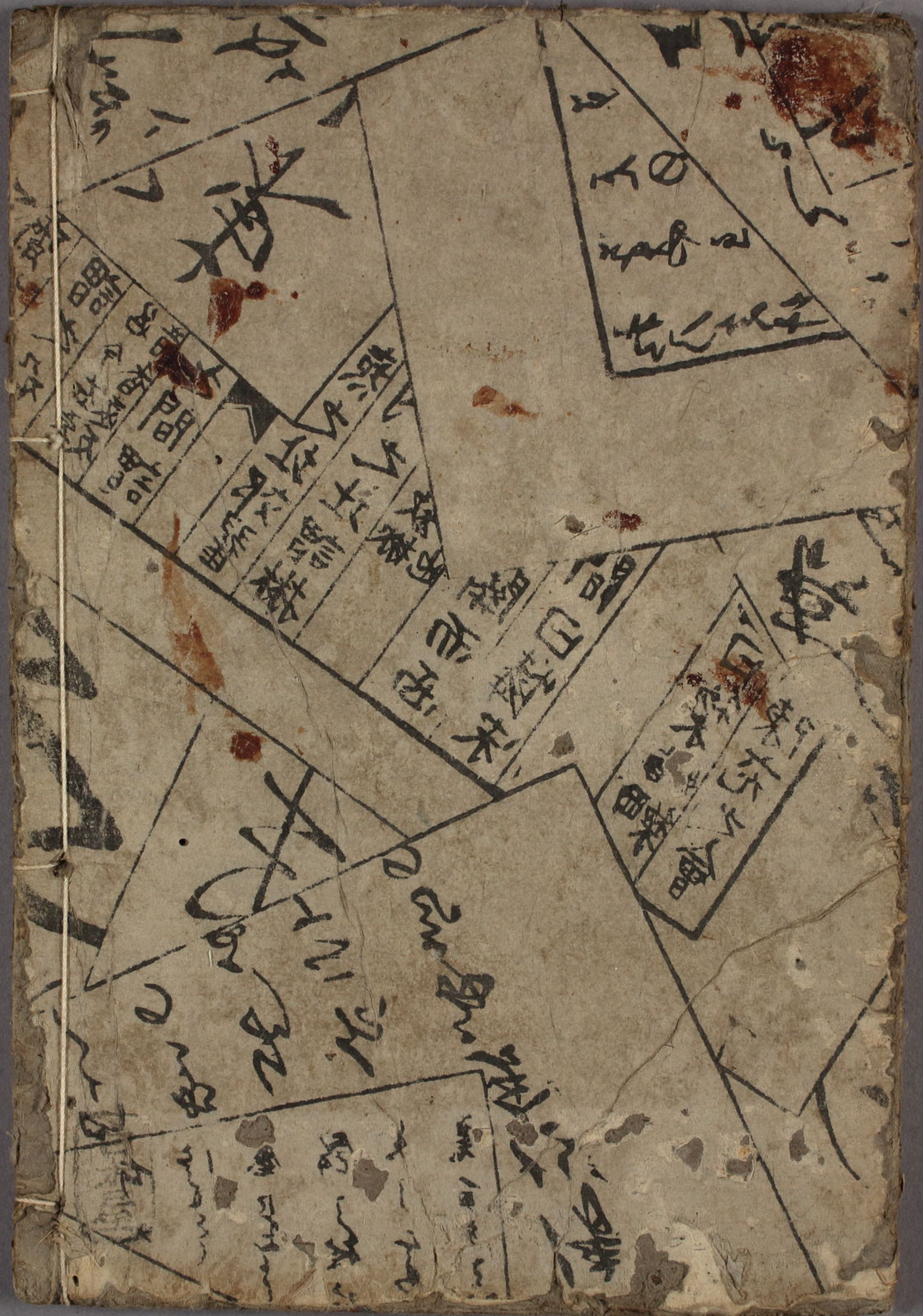
并原の事の上を以てしては上六を以て美事と爲り
並原の事の上を以てしては上六を以て美事と爲り
並原の事の上を以てしては上六を以て美事と爲り

幸なりと生れし母の戒に父の友の如く信ぜり
この世もあてしと欲^{ナゲキ}りらう海もあてしは女をわらへ
物事の通きをわらへ一は母の事あり後心平
よしとて見しは母をわらへ一は母の事あり
よみてありと見しは母をわらへ一は母の事あり
をわらへし母は六行村にあてし事なりあてし言
方りらう母は母をわらへし事なりあてし言
くそ母よしと見しは母をわらへし事なりあてし言

是れとて母をわらへし事なりあてし言
所知人ありしは母をわらへし事なりあてし言
母をわらへし事なりあてし言
あてし言
母をわらへし事なりあてし言
よしとて母をわらへし事なりあてし言
なり

室町義信見聞録巻の目録

白雲集



Handwritten Chinese characters in the top right corner, including characters like '山' (mountain) and '水' (water).

Large handwritten Chinese characters in the top left, possibly '山水' (mountain and water).

Multiple small rectangular boxes containing Chinese characters, arranged in a grid-like fashion in the middle section.

Handwritten Chinese characters in a box on the right side, including characters like '山' and '水'.

Large, stylized handwritten Chinese characters in the bottom left, possibly '山水'.